

松蔭浩之



まつかげひろゆき：
アーティスト。1965
年福岡生まれ。88
年大阪芸術大学卒
業。個展を中心に
国内外で活動。写真、グラフィッ
クデザイン、ライターなど幅広く手
掛け。アート集団「昭和40年会」
宇治野宗輝とのロック・デュオ「ゴ
ージャラス」での音楽活動でも知
られる。



STAR MILK 2000 / GOYA ---- Hiroyuki Matsukage 2001

ピカソを知らない人はいないだろう。著名で偉大な芸術家の1人といえば、必ずトップスリーにランクインするあのピカソ。一般的には、「なんか、わけのわからない子どもみたいな画を描く人。だけど凄い人」的な見られ方で流通している感も強いが、なんにしてもその膨大な作品の量とさまざまなエピソードやスキャンダルとともに、生きていくうちに多大な富と名声をものにし、長寿をまっとうした男である。多くの写真家たちから、「ピカソこそ最高のモデル」と絶賛されたことでも知られる彼の無数のポートレイトを見ると、年代を問わずまっ先に飛び込んでくるのは、「これでか!」と見開かれた“眼”。同時期に活躍したダリも、どういうわけか眼を剥かずにはおれない人だったし、その流れでいくと、我が国では岡本太郎画伯がいる(「なんだコリヤ!」の時のあの眼である)。人はその鋭い瞳を、「まさに天才!」の証とお決まりの文句で讃えるか、芸術家特有の奇行キテレツのシンボルとしてのパフォーマンスだと受け取るだろう。しかしオレはそこに、究極の自己愛と類稀なる探究心や好奇心のあらわれを見る。ピカソはほとんど(伝説ではまったく)まばたきをしなかったということからもうかがえるように、すべてを見なければ気のおさまらぬ貪欲な魂と、そのすべてを見通して受け止められる強い意志の持ち主だったと思う。地球に落ちてきた宇宙からの超人などではなく、徹底的に自分と世界を見据え、そこで自らが思う自分に成るべく、自己を改造して発展させていく驚異的才能の持ち主だったのではないか。オレはピカソを、理想的な人間の成功例として尊敬する。

先月の美学生の話に戻ろう。年間テーマとして提出されるものによくあるのが、「自分はまだ情報の掻き集めに過ぎないと思うので、本当の自分を探す旅をこれから始めてみようと思います」というのがあったりする。「自分探し」「人生は旅」なんて雑誌やテレビ、世間一般でもてはやされている言葉を見繕って見たところで何から始めるのかさっぱりわからない。美術や表現の道を志そうと考えて美術学校に進んだ時点で、すでに自分は見つかっているし、無論、人生という旅が続くなんていうこともあたりまえで、声を大にして言うことでもない。また、情報の掻き集めに過ぎないと言うが、それは過ぎないというよりはむしろ、どこまで行っても過ぎることはないこと。生涯現役を貫くためには、死ぬまで情報を収集して自分

のものにし続ける体力と気力が必要だし、それをして人物が形成されていくのだから。とはいえ、言葉じりだけをとりえてすべてを否定するつもりもない。彼らが直面しているのは、オレ自身が学生時代に思考したことと同じく、「自分が表現者たりえるか」であり、言い換えれば「僕はオリジナル(本物)たりえるか」という、不安に包まれたもやもやとした問題意識なのだ。オレの場合、悶々としてばかりもいたくなかったので、まず手を動かすための支軸として、自分の憧れるアーティストたちの作品や表現を模倣するという取り組みから始めた。いわば「ものマネ」だ。敬愛するマスターたちのスタイルを独断と偏見で分析して真似ることで、彼らのテクニックや思想の断片を身に付けていく作業を続けた。その結果、それらがいっつのまにか自然にミックスされてマツカゲ流のスタイルが形成されていったのである。

そこで、学生たちに「さあ、真似てみる」と言うと、「真似=コピー」ととらえがちなオリジナル至上主義の彼らはいぶかしがる。されど躊躇することなかれ、芸術であれ、芸能であれ、あらゆる芸事は、まず先達を真似ることから始まるのではないか。「真似る」こととはつまり、自分をとりにくく環境や情報に対しての自らの解釈を明快にしていく作業なのだ。そこでクセや個性が確立され、その人ならではの表現というものが発生するようになる。またそれはあくまでも解釈であるから、多分に“ズレ”をともなってくる。ところがそこで生じたズレそのものこそがズバリ、唯一無比のオリジナリティーということにつながっていくのだからおもしろいのだ。

前述したピカソもしかし、今では巨匠/大家と呼ばれるが、時代ごとに流行にもアンテナを張りながら試行錯誤を重ねた。アフリカの原住民の彫刻の研究と独自の解釈から“キュビズム”という概念を産み出したように、なにかを手本にしながら、1つ1つ自分のスタイルを築き上げていったのである。「今すぐ自分は本物だと叫びたい」衝動なんて、まずは捨ててしまったほうがいい。実のところ、真のオリジナリティーとは本人のまったく知らないところで発揮されていたりするものだから。ただただ、自分の信じることを探し出してガムシャラに突っ走ってみる。そしてそのうち振り返ってみて、誰かがあなたのやっていることを「真似していた」ということになれば、あなたはオリジナル/本物だ。



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp